

解説



品質工学のつながり (4)

Connection of the Quality Engineering (4)

矢野 耕也*¹

Koya Yano

鴨下 隆志*²

Takashi Kamoshita

高橋 和仁*³

Kazubito Takabashi

1. (株)オーケンを舞台にした MT システム 開発と人のつながり

2016年2月号の「品質工学のつながり(3)」において、鴨下隆志、田端和人、高田圭の3人の出会いを通し、品質工学会のMTシステムの最初の適用事例から、初期のソフトウェアの開発を通じて、電気通信大学において行われた実験やそれに基づいたソフトウェア開発におけるエピソードのいくつかが述べられた¹⁾。田端と高田それぞれが学生の立場から企業人へと立場が変わり、ソフトウェアへの関わり方が異なった後の経緯をベースに、オーケンという田口玄一の会社がどのような役割を果たしたかを考察するのが今回のテーマである。

2. 成り立ちから業務を請けるまで

—(株)オーケンとはそもそもどのような位置づけの企業だったのか。

矢野 あくまでも伝え聞きの部分が多いが、田口玄一の電電公社時代の上司である茅野健(1910～1997)が昭和30年代に部下であった唐津一と松下通信工業に移り、定年後の1972年頃、関係のあった企業である双葉電子工業(株)の東京事務所であったビルの一室を譲渡され、(株)オーケンとして始まったといわれている。茅野健の著書には創造法・発想法としてのオーケン法という言葉が用いられ、語源は応用研究の応と研からとったと想像するが、QCコンサルタントの西堀榮三郎による命名とあ

る²⁾。また副社長に双葉電子工業の専務であった原田明を迎え、製品開発に関するさまざまなコンサルティングを行っていた。固定社員は茅野、原田、そして日本規格協会の管理技術センターを経由して創業当初から事務方として支えていた鈴木由紀子の3名であるが、当時のQCや管理技術を担っていた高名な先生方が比較的自由に出入りして、闊達に活動を行っていたようである。

—具体的にはどのような方がいたのか。

矢野 田口はいうまでもないが、原田の戦中戦後の東芝の上司であり、田口が所属した電電公社西堀特別研究室の長で、また南極越冬隊長として有名であった西堀榮三郎、電電公社時代の田口の直属上司であった唐津一、品質工学会初代副会長であった元沖電気の馬場幾郎など、とにかくいろいろな人材が集まっていたと聞く。なお西堀は日本規格協会のあった赤坂付近に事務所があり、馬場幾郎が裏で支えていた。西堀は戦時中の真空管開発、戦後のQC黎明期の活躍、NHKの番組などでも有名な南極越冬隊、そして原子力関連の仕事といった巨大なスケールで活躍をした人材で、何か足跡を残したいという馬場の思いがあったというが、結局どんなに名が知れていても時間とともに風化してしまうことを痛感されたのか、田口玄一という天才を残す方法として、学会形式(団体の設立)の形で1993年に品質工学フォーラムの立ち上げに尽力したと聞いている。

—どのような形で業務を請けるようになったのか。

矢野 1990年代中頃まで副社長であった田口が社長に就任した後の1997年、矢野宏が電気通信大学を退職した際、自宅宛てにオーケン副社長の名刺が予告なく送られたといった有無をいわずの入社があり、そして後に鴨下隆志がコンサルタントとして加わった新体制になったある時期から、「品質工学

*¹ 日本大学

*² 応用計測研究所(株)

*³ 神奈川県産業技術センター